ドイツ発

海外に住む子どもたちの日本語習得・継承を考える冊子

『つなぐ―わたし・家族・日本語』抜刷

２０１４年１１月１日初版発行

２０１７年１１月転載用抜刷作成

企画・制作・発行　日本文化普及センター

（※発行時の名称は、日本文化言語センター）

冊子表紙。 A4 版 4 色刷 150 頁

寄稿文（pp. 111-121）

ドイツに住んでいる子どもたちの

日本語習得のために知っておきたい言葉がけのコツ

加藤 智絵里

※本文内の所属や年数は執筆当時（2014）のものです。
執筆者の最新プロフィールは以下をご覧ください。

かとう・ちえり／言語聴覚士
日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士

大阪教育大学特別支援教育特別専攻科修了。 渡独前は神戸大学医学部附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科にて、臨床に携わりながら研究生として在籍。2010 年博士号取得。2010 年から 5 年間ドイツ（マインツ）在住。2015 年帰国後は、大阪大学医学部附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科にて、音声治療および頭頸部癌の嚥下障害・構音障害のリハビリテーションに従事。

～ホームページへの転載にあたって～

邦人医療支援ネットワーク（JAMSNET）ドイツの会員である医師のクリニックにも、子どもの言葉の悩み相談が寄せられるそうで、そうした方々に冊子『つなぐ』の拙稿が役に立つのではないかと、馬場恒春先生よりお話を頂きました。早速、発行元の日本文化普及センターに連絡を取り、この度、JAMSNET ドイツのホームページに原文のままの体裁（縦書き）でご覧いただけることになりました。

拙稿は、ドイツ在住 3 年目あたりより言語聴覚士として同地でも活動をしたいと思い立ち、多言語環境における日本語の習得について、自分の子育てを通じての経験、日本人プレイグループや日本語補習授業校で知り合った多彩な背景を持つご家族との交流、そして様々な文献の精読を通してまとめたものです。

2015 年 3 月に、無事に夫の海外赴任を経て、帰国いたしました。それ以降、ドイツ語維持の難しさを痛感しております。
また、帰国後はフルタイムでの病院勤務とともに生活が 180 度変わり、親子ともども、逆カルチャーショックの渦中に放り出された感が未だぬぐえません。現在は、大学病院にて音声治療（機能性音声障害、声帯結節、声帯萎縮など）や頭頸部癌患者の嚥下障害・構音障害に対するリハビリテーションに従事しております。

そうした中、記事転載のお話を頂けたことを感謝するとともに、拙稿が、ドイツ在住の皆さまのお役に　少しでも立つことができれば何より幸いです。

それでは、ドイツ・日本に住む皆さま、そして、どこかで繋がっている世界中の皆々さまのご健康とご多幸をお祈りいたしております。

2017 年 11 月吉日

大阪大学医学部附属病院
耳鼻咽喉科・頭頸部外科
言語聴覚士　加藤 智絵里

©無断で転載・複写・複製することは法律上禁止されています。お問い合わせは下記まで：info@japanisch-kulturezentrum.de

ドイツに住んでいる子どもたちの日本語習得のために知っておきたい言葉がけのコツ

加藤智絵里（かとう・ちえり）
言語聴覚士
日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士
大阪教育大学特別支援教育特別専攻科修了、
神戸大学病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科に所属し、
臨床に携わりながら研究生として在籍。
二〇一〇年博士（医学）学位取得、その後渡独。
マインツ在住。二〇一五年、本帰国（大阪）予定。

◆はじめに

私は二〇一〇年に夫の海外赴任に伴って、一歳の娘と共に渡独しました。それまで日本では十余年、言語聴覚士として脳卒中後の失語症（脳の言語中枢を損傷することにより、話す・聴く・読む・書くことなどが難しくなる状態）や構音障害（口や舌などの発声発語器官の麻痺により、正しい発音がしにくく話し言葉が不明瞭になる状態）などの言語障害、高次脳機能障害や摂食・嚥下（えんげ）障害（食べたり、飲み込んだりすることが難しい状態）、舌癌（ぜつがん）などの口腔癌（こうくうがん）・中咽頭癌（ちゅういんとうがん）の術後の構音障害、摂食・嚥下障害や、音声障害などの患者様に対して、医師の指示のもとセラピーを行なっておりました。

ドイツに来てからは、日本語プレイグループに参加したり、娘が現地幼稚園、補習校に通うようになったりして、交流の輪がぐっと広がり、自分自身のドイツでの子育て体験や、いろいろなご家族との交流を通して、複数の言語環境のもとで日本語を習得することについて、興味を持ち始めました。

国際家庭のお子様の中にも、日本語がとても上手なお子様と、親が日本語で話しかけても全てドイツ語で返事をするお子様など色々です。子どもたちが乳幼児期よりドイツで育ち、その中で自然に日本語を身につけていくには、やはり親のかかわり方、すなわち言葉がけがとても重要であると感じています。

これまで言語聴覚療法の分野で学んできたことや、失語症などの言語障害をもつ患者様に対するセラピーや家族指導などの経験を通じて、言語発達や言葉を引き出すコミュニケーションをテーマに、**『日本語での言葉がけセミナー～ドイツに住む子どもたちの日本語を育むために、まず私たち親が言葉がけのコツについて学ぼう～』**というセミナーを二〇一三年よりマインツ(Mainz)の自宅にて開催してきました。回を重ねるごとに内容がボリュームアップしていき、これまでの集大成として、二〇一四年六月一五日、フランクフルトで講演会を実施する機会に恵まれました。

本稿では、そのセミナーでお話しした中から、特に重要と思われること、生活において取り入れられることを中心にご紹介します。

〈フランクフルトでのセミナー内容〉

- 言語聴覚士の仕事とは
- 子どもの言語発達について
- 多言語環境で育つ子ども達の言葉の特徴について
- 子どもと大人が相互に反応し合うことで、学習とコミュニケーションを促進しようとする「INREAL（インリアル）・アプローチ」について（具体的な会話例を交えて説明）
- 日常生活でできることを具体的に紹介（買い物、散歩、旅行、読み聞かせなど）
- 多言語環境で育つ中での、メリットと気をつけなければならないこと
- 先輩ママから伝授して頂いた、おススメのこと・反省点

◆生活習慣と子どもの言語発達

複言語環境で子育てをしていると、もっと言葉が出るように、お話ができるようにと〈言葉〉だけを追いかけてしまうことが少なからずあるようです。しかし、どのような環境においても、言葉を獲得していくための基礎作りとしては、朝早く起きて、夜早く寝るなどの生活習慣がなにより大切です。

日本の言語聴覚士・中川信子先生も述べられているように「生活習慣がまず土台、そこから身体が育ち、そして心、最後に言葉が育つ」[1]ということを私自身、実感している毎日です。この一文は、心に響くものがあり、ぜひ皆様と共有したいと思いセミナーの冒頭部分でもご紹介させていただきました。日々の生活、食事、身体の発達に合った適度な運動・遊び、言葉がけなどはすべて繋がっているだけでなく、子どもが言葉を習得・獲得するための土台であり、長い年月をかけて育まれていきます。

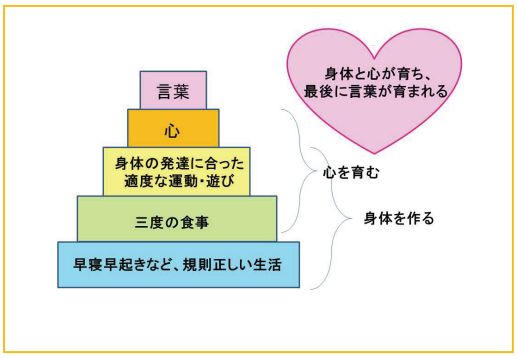

図１　言葉のピラミッド

また、漢字本来の意味とは、少し違うようですが、昔、日本のドラマのセリフにもありましたが、日本語では、〈親〉という漢字は、「木の上で子どもを見ている。つまり、親はいつも子どもを見守っている」と解釈されることもあるようです。また、食べることの〈食〉という漢字は、「人を良くする」と書くとも言われています。そのように、親が子どもに与える影響は計り知れません。食事で身体に栄養を、言葉がけで心に栄養をつけ、子どもたちの言葉を育んでいきたいものです。（図１）

◆複言語環境ゆえの言葉（日本語）の特徴

日本国外で子どもたちが日本語を習得する際に、言葉の使い方に様々な傾向が見られます。これらは、子どもたちのおかれた状況によって影響が出ているものと思われます。

まず、**語彙数**が日本で暮らす日本語が母語の子ども（モノリンガルの子ども）に比べて少ないことが指摘されます。生活全体を通じて日本語に触れる機会や、家庭で話したり聞いたりする日本語が少ないことが影響しています。

つぎに、**ドイツ語の干渉**により、日本語の発音に影響が及ぶことがあります。母音や子音も日本語とドイツ語では違うため、発音に影響が出たり、アクセントの強調部分が異なったりする場合があります。

そして、**文法や言葉の使い方**に誤りがみられることがあります。例えば、「あげる、もらう、くれる」といった**動詞の使い方**に混乱が見られたり、〈手が冷たい〉ことを「寒いと冷たい」が混じって「手がさむたい」、あるいは〈お風呂に入る〉ことを「お風呂する」、〈○○君を呼んでくる〉のことを「○○君を取ってくる」と言ったりするなど**言い誤り**がみられることがあります。また、敬語を使う機会が圧倒的に少ない場合には、上手く**敬語が使えない**こともありましょう。

さらに、日本語母語話者の母親と過ごす時間が長く、男性言葉に触れる機会が限られている男の子の場合には、大きくなっても**女性言葉**を使い続けることもあるようです。同年代もしくは、少し年齢が上のお兄さんと交流を持つと、すっと直る場合があります。

◆「一人一言語」の原則

複言語環境では、両親がそれぞれの母語で話しかけることが良いと言語教育学者や海外の言語聴覚士によっても提唱されています。[2]これを「一人一言語」の原則といいます。次に想定される、主な三つのパターンを、それぞれ見てみましょう。（図２）いずれもドイツ在住の場合です。

①　〈一言語（日本語）家庭〉

両親ともに日本人家庭の場合

両親ともに日本語で話しかけます。子どもを現地幼稚園に入れる場合、幼稚園などで、ドイツ語は自然に学びます。

②　〈二言語（日独）家庭〉

例えば母親が日本人で、父親がドイツ人の場合

母親は日本語で、父親はドイツ語で話しかけます。現地幼稚園に通いだすと、日本語よりドイツ語が強くなる傾向があります。

③　〈三言語以上の家庭〉

例えば母親が日本人で父親がポーランド人の場合で、両親の共通言語が英語の場合など

母親の母語が日本語、父親の母語や第一言語がドイツ語以外の言語の場合、母親は日本語で、そして父親は第一言語が例えばポーランド語であったら、ドイツ在住であってもポーラン

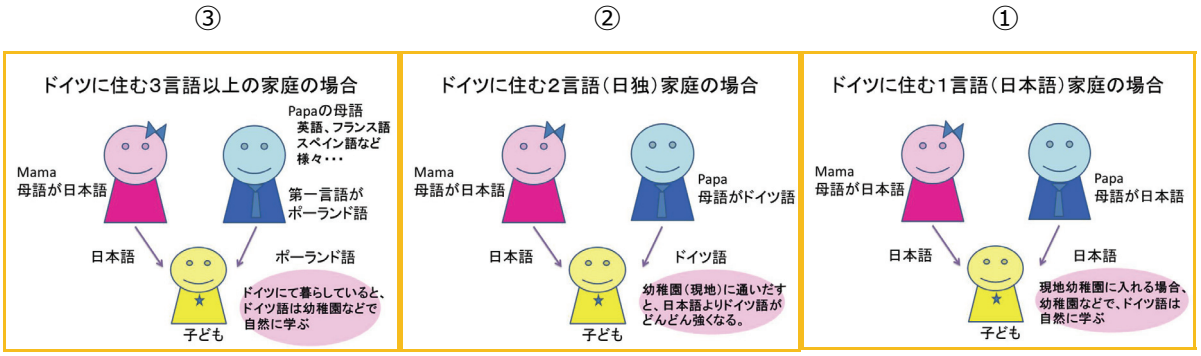

図２　３つの家庭のパターン

ド語で話しかけると良いとされています。子どもは、ドイツ語は幼稚園などで自然に学びます。

いずれのパターンも、複数の言語環境で子育てをする場合、母親も父親も子どもには自分の思い・気持ちがもっとも伝えやすい言語（＝母語や第一言語）で話すのが良いとされています。例えば父親の母語がポーランド語であっても、幼少の頃にドイツに移住していたり、在独歴が長く、第一言語がすでにドイツ語になっていたりする場合は、ドイツ語で話すことをおすすめします。親の心のこもった〈言葉がけ〉によって、子どもはその〈言語〉に触れていきます。ですので、親が「どの言語」で「どのように言葉がけをしていく」のかがとても重要です。

では次に、具体的にどのように言葉をかけるといいのか、実際の言語セラピーで用いられている手法（インリアル・アプローチ）を参考にして考えてみたいと思います。

◆インリアル・アプローチを使って（INREAL Approach）

子育てをしている中で言葉がけの大切さを痛感することが、私自身、これまで色々な場面でありました。例えば、「○○しちゃダメでしょ！」、「そっち行かないで！」など否定的な表現をよく耳にしたり…。

そうした言葉の投げかけ方が非常に気になり始め、子どもの言葉を育むためには、やはり親の言葉がけ・親のかかわり方が重要なのではないかと思い当たりました。そして、言葉がけの具体的なコツを考える際に、学生時代に学んだ「インリアル・アプローチ」[3]が有効なのではないかと思うようになりました。

「インリアル」とは、**IN**ter**REA**ctive **L**earning and Communication の略称で、一九七〇年代にアメリカで始まった、言葉の遅れがある就学前児童を対象としたコミュニケーション・アプローチです。言葉のやりとりだけを目標にするのではなく、〈コミュニケーションを取る〉ことをまず念頭においた手法で、以下の七つの言語心理学的技法を用いています。

実際の言語セラピーにおいては、遊びを媒体にしたやりとりや、学齢期では会話を中心として、インリアル・スペシャリストまたはトレーナーと一緒に子どもと大人が相互に反応し合うことを言います。さらには、それをビデオに記録して、実践を録画したビデオを再生しながらトランスクリプトを作成し、ビデオ分析をします。実践とビデオ分析という手法により、子どもの発達程度のみを問題視するのではなく、子どもと大人、両者の相互作用に着目し、コミュニケーションの改善を図っていきます。[4]

実は私、まだ結婚もしていない学生の頃から、「このインリアルの七つの技法は、自分が子育てする時にも使えるわ！」と思っていました。そして、いま自分自身がここドイツで育児をするようになって、複言語環境で育つ子どもたちにも、この技法は使えるのではないかと改めて感じています。後に、アメリカでバイリンガル児のセラピーに携わっておられる日本人の米国言語聴覚士協会認定言語聴覚士さん[5]の中にも、親御さんにインリアル・アプローチの一

「インリアル」実践時に使用する言語心理学的技法

① **ミラリング** *Mirroring* :	子どもの行動をそのまま真似る
② **パラレルトーク** *Parallel talk*:	子どもの行動や気持ちを言葉にする
③ **セルフトーク** *Self talk*:	大人の気持ちや行動を言葉にする
④ **モニタリング** *Monitoring*:	子どもの声や言葉をそのまま真似る
⑤ **リフレクティング** *Reflecting*:	子どもの言葉をさりげなく言い直して聞かせる
⑥ **エクスパンション** *Expansion*:	子どもの言葉を広げて返す
⑦ **モデリング** *Modeling*:	子どもに会話のモデルを示す

部を教示されていることがわかりました。

前述した「インリアル」の七つの技法のうち、複数の言語背景を持つ子どもへの言葉がけとして、「②パラレルトーク」、「③セルフトーク」、「⑤リフレクティング」、「⑥エクスパンション」、「⑦モデリング」が特に有効ではないかと感じています。国際家庭の場合、日本語の**聴覚刺激**が日本人家庭に比べて、単純計算でも半分になるので、乳幼児期に、親が意識的にパラレルトーク、セルフトークをしていくと良いと考えます。

＊子どもの行動や気持ちを言葉にする

②パラレルトークの場合

お子様がまだ小さい場合など、例えば一緒にアイスクリームを食べながら、「わあ、おいしい」、「わあ、冷たい」と、子どもが言いたいであろう気持ちを代弁して言います。他には、子どもが何かを取ろうとしている場面で、「うーん、取れるかな、取れるかな。ああ取れた！よかったねえ、すごいねえ」のように言葉がけをします。子どもの行動や気持ちを言葉にするだけでなく、少しアレンジを加えて、「取れるかな、取れるかな」と**言葉を繰り返し**たり、「すごいねえ」などの**誉め言葉**を入れたりすると尚、よいでしょう。

＊大人の行動や気持ちを言葉で表現する

③セルフトークの場合

「ママ、今、晩ごはん作ってるよ。」「ああ、きれいなお花が咲いてるね。ママ、このお花、大好きなのよー。」のように言います。このように、「ママ、このお花、大好きなのよー。」と**感情を表わす言葉をプラス**すると、心がより伝わりますので、ママ（またはパパ）の言葉である日本語に対して、より親しみやすくなります。

＊子どもの言葉をさりげなく言い直して聞かせる

⑤リフレクティングの場合

子どもが「テリビ」と言った時に、「テレビね」とさりげなく伝えます。初めて会った人に向かって「これ、なぁに？」と言った時には、「〈だれ〉って言うよ」と促します。子どもが言葉を言い間違えた場合に、それを正しく直そうとして、「○○って言ってみて！」と**何度も同じ言葉**を言わせることは、**子どもにとって苦痛に**なります。

子どもは子どもながら、国際家庭のお子様でしたら特に、「自分は、ドイツ語の方が楽に話せて、日本語は苦手…」という意識をすでに持っている場合もあろうかと思います。頑張って話しても、親にその都度間違いを指摘されて、言い直しを強要されるとなると、「もう日本語、話したくない！」と思ってしまうこともあるようです。

まずは、**話したいと想う気持ちを大事に**、過度の指摘にならないよう、**親がブレーキ**をかけながら、言い直して聞かせることが大切になります。子どもが日本語で話すことを嫌がらないよう、小さい頃より、「ママ、○○ちゃん（君）と日本語でお話しできて嬉しいわ」など**ポジティブな言葉**を入れていくとよいでしょう。

＊子どもの言葉を広げて返す

⑥エクスパンションの場合

子どもが「あ、ワンワン」と言った時に、「白いワンワンだね」「ワンワンが走ってるね」というように、子どもの言った**言葉に付け加えて、内容を広げ**て返します。

＊子どもに会話のモデルを示す

⑦モデリングの場合

「あ、バス」と子どもが言った時、「あれは○○駅行きだよ」と**新しい情報を伝えて**会話をしていきます。また「あっ、ボールあっち」と言った時に、「あ、ボールがあっちに行っちゃったね」「あっちにボールがコロコローって転がって行ったね」と**正しい文章に**して聞かせてあげるとよいでしょう。それを聞きながら、だんだん文章の構造がわかってきます。

◆日頃から気をつけたい言葉がけ

こうした「インリアル」の技法のほかにも、日頃から気をつけたい言葉がけに、次のようなものがあります。すでに自然な形で実践されている方もいらっしゃるでしょうし、さまざまな育児書で触れられている内容と重なることもあるかもしれませんが、お付き合いください。

＊否定的な表現は言わないようにする

例えば、「登っちゃダメでしょ！」と否定の表現ではなく、「下りてね。」や「下りようね。」など、**好ましい行動を具体的に言葉で**伝えましょう。「そっち行かないで！」は、「ママが見えるところで遊んでね」と**言い換える**とよいでしょう。

＊こそあど言葉（指示代名詞）で済ませないように話す

「あれ／それ取って」ではなく、「コップを取って来て」と**具体的に話す**ことも大事です。

＊子どもから言葉を引き出すように話す

例えば、暑い日に子どもが外から帰ってきた時に、どのように聞けばいいでしょうか。次の四つのやりとりを比べてみてください。

1　**母親**「のど乾いたでしょ、はい、お水。」
　子ども「…」
〔これでは、子どもはただコップを受け取るだけになってしまいます。気を利かせた聞き方ですが、子どもから言葉は引き出せていません。〕

2　**母親**「りんごジュース、飲む?」
　子ども　頷き（はい）、首ふり（いいえ）
〔子どもはただコップを受け取るだけになってしまうかもしれません。あらかじめ子どもの好みをわかっており、ママならではの聞き方ですが、選択肢のない聞き方だと、子どもは頷き、首ふりで済ますことができてしまいます。〕

3　**母親**「お水飲む?それとも、りんごジュースにする?」
　子ども「りんごジュース。」
〔二択、三択で聞くと、子どもから答えを引き出しやすくなります。〕

4　**母親**「何、飲む?」
　子ども「牛乳。」
〔子どもは自分の好きな飲み物を答えるかもしれません。子どもが自由に答えられる質問の仕方です。〕

これら1から4の例に挙げた母親の問いは、子どもに「日本語を聴かせる」という意味では、一〇〇%正しい日本語です。しかし、子どもから言葉を引き出すという観点では、3の**二択、三択で**答えられるような質問をする、4の**自由に答えられる**質問をする、これらの方が望ましいでしょう。（図3）こうしたコツは、日常会話の中ですぐに使えます。

図3　言葉を引き出す言葉がけのコツ

◆これまでに相談を受けた例より

また、これまでご相談を受けた中で、このような例がありました。

「子どもに、『今日、幼稚園（または学校）どうだった?』と聞くと、『なんにも』とか『忘れた』という返事が返ってくることがあります。本当にどのように過ごしたのか忘れちゃったのかな?と思って、そのまま会話を終わらせてしまっています。」

このような場合、日本語では上手く説明できないと子ども自身が感じていて、日本語で説明するのを回避するために、「なんにも」とか「忘れた」で済ませている可能性も考えられます。ですので、そのような返事が戻ってきた時には、ぜひ「お絵描きしたの?それとも、外で遊んだ?」や、具体的にお友達や先生のことを質問したり、聞いたりしてみましょう。

こんなケースも伺ったことがあります。日本語を話して欲しいと思うあまり、あるご家庭では子どもが家庭においてドイツ語で話すと、そのことを厳しく叱り（ドイツ語禁止）にしてしまったそうです。しばらくして、吃音（言葉を繰り返してしまったり、言葉に詰まったり円滑に話せない状態）やチック症状（不随意に起こる症状で、まばたきや肩上げなど）がお子様に出てしまったということです。その後、ドイツ語で話してもいいよと母親が対応を変えた結果、症状は後に改善したそうです。

子どもが三歳以下の場合は、複言語環境においてお話しする時に、複数の言語が混じることは少なくありません。四歳を過ぎると次第に頭の中の引き出しが整理されてくるため、ドイツ語と日本語を正確に分けて話せるようになることが多いようです。時に「日本語では○○だよ、ドイツ語では○○」というように通訳のようなこともでき始めます。お子様の年齢にかかわらず、子どもが何語であっても話し始めた時には、それを否定することは避けたいことです。

さらに、複言語環境における言葉の獲得において、親御さんが一番心配されるのは、ドイツ語も日本語もどちらも十分に育たない「リミテッド」という言語運用が限られた状況ではないでしょうか。その子が生きていく上で必要な言語をまずは第一に考え、心身に負担を与え過ぎないよう配慮が必要でしょう。完璧なバイリンガルになることを親が求めすぎ、その結果、子どもに負担がかかり、（精神的に）壊れてしまうことは何としても避けたい状況です。

また、親御さんによっては、日本語の話し言葉の随所にドイツ語を挟む話し方になる場合もあるようです。親は子どもの「鏡」であるといっても過言ではありません。自分がよく使う言い回しなどを子どもも使っていて、思わず苦笑してしまったり、びっくりされた経験はどなたもあるのではないでしょうか。できるだけ、日本語とドイツ語を混ぜ合わせないで話すように日頃から気をつけたいものです。

◆日々の生活ですぐにでも実践できそうなこと

毎日の生活の中ですぐにでも実行できそうな、子どもたちの言葉を育む言葉がけを以下にいくつか紹介します。（図4）

＊お料理・お手伝い

お台所に一緒に立って、お料理をすると、その過程で、**道具の名前・動作など様々な言葉**を日本語で学ぶことができます。例えば、クッキーや餃子を一緒に作ると、その過程で、材料の名前をはじめ、「こねる」「混ぜる」といった動詞、「泡立て器」「菜箸」といった名詞など沢山の言葉に触れられます。また年齢に合わせて、お豆腐を切ったり、野菜の皮むきなどを実際に手伝わせると、**体験と言葉**とが結びついてよいでしょう。

和菓子を作っています

＊散歩・買い物

「鳥の鳴き声が聞こえるね。」「わあ、お花が咲いてるね。ママは、桜の花が大好きなのよ。」「美味しそうな苺が売ってあるね。」などお話ししながらのお散歩や買い物は楽しいですし、親御さんが見たもの・感じたことを言葉にしていくことによって、お子様が耳にする日本語の語彙が自然と増えていきます。

＊読み聞かせ

子どもが「読んで！」と言ってくるあいだは、**毎日、読み聞かせ**をすることをおすすめします。そして、ただ〈読んでおしまい〉ではなく、本を通じて**親子で会話**をすることが大切です。例えば、新しい言葉を覚えたり、どんな気持ちだったかを子どもに聞いたり、観察や日常生活でできそうなことがテーマの本であれば、本に書かれていることを実践することもできます。

海外生活では、なかなか日本の絵本を手にすることが難しいですが、最近では海外にも絵本を配本してくれる団体が増えてきています。絵本を毎月配送してくれる「童話館　ぶっくくらぶ」や、「クレヨンハウス　ブッククラブ」、絵本と教材を三ヶ月に一回配送してくれる「海外子女教育振興財団」などがあります。

アメリカでは、米国小児科学会が就学前の準備に必要な早期教育の中で、**親子での本の音読**を推奨しており、次の「5つのR」[6]を提示しています。この考え方は、日本語の本を親子で読むうえでも参考になろうかと思います。

【5つのR】米国小児科学会

① 日常生活において本を読む（Reading）
② 韻を踏む（Rhyming）
③ 規則正しい生活（Routines）
④ 日々できたことを褒める（Rewards）
⑤ 健全な発達の基礎となる親子関係（Relationships）

このうち「韻を踏む」ことは英語表現の一つの大きな特徴であり、日本語で本を読む際には関連しないのではないかと思われるかもしれません。しかし、日本語の子どもの本には、**擬音語・擬態語（オノマトペ）**による「繰り返し」の表現が多く見られ、音を楽しむという点では韻を踏むことと類似しています。一般的に、脳の働きとして、言葉は左脳、音楽は右脳が司っていると言われています。そのことから、韻を踏んだり、音のリズムを感じながら、音楽的要素を用いて音読することによって、左脳、右脳ともに活発に使うということがいえるかもしれません。

とくに、日本語の日常会話では欧米圏の言葉に比べて擬音語・擬態語が使用される頻度が高いといわれています。擬音語は生物の声や無生物の出す音を表わす語で、例えば「ガタンゴトン（電車の音）」、「ニャーニャー（猫の鳴き声）」などがあります。一方、擬態語は動作・状態などを音で象徴的に表現する語で、例えば「ぽたぽた（水が垂れる様子）」、「きらきら（光る様子）」などがあります。

子どもが小さい頃より、親御さんが日常の生活場面で擬音語・擬態語を取り入れて話すことを意識したり、絵本などを通じてそうした表現を学ぶ機会を作ったりすると**日本語の音やリズム**も楽しめるようになります。

＊CDで歌を聴く

車での移動時間などを活用して、繰り返して日本語の歌やCDブックを聴くといいようです。

時期	内容
毎日・週末	買い物、散歩
毎日	お料理
毎日	お手伝い
毎日	読み聞かせ
毎日	音楽（童謡）
毎日	宿題・家庭学習
時々	Skype
特別な機会	旅行、一時帰国中の体験入園・入学

おじいちゃん、おばあちゃんにも協力してもらう。
子どもが話せるように、おじいちゃん、おばあちゃんにも言葉がけのコツを伝授！

図4　いろいろな機会

＊旅行

旅行先の様子をインターネットで一緒に調べておいたり、目的地の地図や観光パンフレットを事前に見ておいたりすると、**経験がより深いものに**なります。日本への帰国時には、親類（おじいちゃん、おばあちゃん、いとこ等）やお友達との交流、美味しいものを食べた・好きなおもちゃを買ってもらったなど心はずむ嬉しい体験の数々が、その後の日本語学習のモチベーションアップに繋がります。

＊スカイプなど通話アプリを利用する

インターネットの恩恵を受けている時代ですので、世界中どこにいても無料でビデオ通話ができます。海外生活において、スカイプなど無料通話アプリを活用している方も多いのではないでしょうか。

日本語の向上のために、スカイプで日本のおじいちゃん、おばあちゃんと子どもが話しをする機会を作ることも一案でしょう。**孫の言葉を引き出すような言葉がけ**をしてもらうように、おじいちゃん、おばあちゃんには事前に伝えておくといいと思います。

身内の話で恐縮ですが、以前は私の母も孫の描いた絵を見て、「わあ、○○ちゃん絵を描いたの？上手ね。うさぎさん？リボンも付いていて可愛いねえ」などと言っていました。おばあちゃんとしては目一杯頑張って言葉がけをしてくれているのですが、子どもが説明したいであろうことまでも全て先回りして言ってしまっており、子どもは「うん」としか言えない状況でした。

幸い、言葉を引き出す言葉がけのコツを伝えてからは、随分と**会話のキャッチボール**ができるようになり、スカイプを通じて日本語で会話をする時間が豊かになり、今ではおばあちゃんに感謝しています。

◆日本語習得の特別な機会

これまでは日々の生活の中での言葉がけの機会についてみてきました。次に、日本語習得の特別な機会について紹介します。

＊体験入園・入学をする

特別な機会としては、一時帰国や、一時帰国中の体験入園・入学なども言葉を育む上ではいい経験になり得ます。実際に体験入園・入学の手続きをして実践されている先輩ママ達も多くいらっしゃいます。公立の幼稚園・学校の場合、住民票の要・不要などの条件は各自治体によって異なるようですので、前もって**自治体に問い合わせ**てみましょう。

＊夏のキャンプや短期留学

幼少時には日本語を話すことを拒否したり、苦手意識が強くて積極的に勉強に取り組まなかったお子様も、何かをきっかけに**日本に興味**を持ったり、夏休みに日本でのキャンプに参加したり、短期留学したりすることで、**日本語に取り組む意欲が上昇**しその後、**日本語力が一気に伸びた**というお話を伺うこともあります。そして一〇代後半で、日本へ留学して、就職された方もいらっしゃいます。

言葉を身につけるには、どれだけドリルをするかではなく、**どれだけ人とコミュニケーションを取るかが大切**になります。いろんな場面で、いろんな人と**五感をフルに使う**といいと思います。旅行などでは、日常生活では味わえないところの五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）を使うので、記憶に留まりやすいのではないかと思います。

これらの経験が日本語に一層興味を持ったり、日本語習得に向けてのモチベーションアップに繋がったりするはずです。

◆先輩ママ達から伺った反省点とおススメのこと

これまで、お子様がもう成人され国際的に活躍されている方、お子様がギムナジウムまたは大学に通われている方など様々な先輩ママさんにお目にかかり、子育て真っ最中のママ達へ何か工夫されたことなどあれば、ぜひ伝授して下さいとインタビューさせて頂く機会を持ちました。子育てを振り返って頂き、いろいろ伺ったお話の中より、先輩ママ達からの珠玉の知恵や工夫をお伝えします。

＊先輩ママ達からの声　〈反省点〉

1・「子どもと一対一の時は、**日本語で話す**ということを徹底すれば良かったです」

「日本語とドイツ語と**混ぜて話すのは良くなかった**と思います」

特にドイツの小学校（四年制）からギムナジウム（日本でいう中高一貫校）などに進学する辺りから、子どもも多忙になり、ルールがくずれやすくなるので要注意とのことです。

2・「日本語の衛星放送サービスに加入して**日本のテレビなどを見る機会**を作れば良かったです」

日本のニュースなどを毎日一緒に見ていれば、今の日本を知ることもできるし、話題もいろいろあったのではないかという思いがあるそうです。

3・「**読み書き**をもっとちゃんとすれば良かったです。話したり聞いたりは出来るのですが…」

特に**漢字**で苦戦されたそうです。簡単な漢字は知っていても、少し難しくなると知らない字が多いので、本が読めないとのことでした。

＊先輩ママ達からの声〈おススメのこと〉

1・「**親子で共通の話題**を見つけて話すといいです」

YouTube やＤＶＤを活用してもいいと思いますし、前述のようにニュースを一緒に見ると、自然に会話が引き出されるでしょう。

2・「**親子で交換日記**をつけています」

文字を書くということが、日常生活で減っていますし、日記は残るものなので後から読み返すこともできます。小学生以上のお子様と一緒に取り組めます。

3・「**親も子どもと一緒に漢字検定**を受けるために勉強しています」

海外生活が長くなると、どうしても漢字がすぐに浮かばない…ということがありがちです。親の脳の活性化のためにもいいですね。以上のことから、課題を子どもにばかりさせるのではなく、**親子で一緒に取り組む**ということがポイントのようです。

4・「一時帰国で、**日本で楽しい体験**をさせたことが、ドイツでの日本語学習の意欲に繋がり、とても良かったです」

「一時帰国の時に、体験入園・入学させました」

短い期間でも、日本の幼稚園、学校などを体験できると日本語の勉強だけでなく、日本の文化、集団行動なども学べ、なによりお友達づくりができます。

5・「**親の日本人の友人**を自宅に招いたり、お泊りの機会を作ったりしました」

敬語を使う機会を作るために、あえて敬語で話す必要のある方をお客様として自宅にお招きし、手料理を振る舞う努力をしましたと話して下さった方もいらっしゃいます。

敬語については、十代後半くらいに日本の企業に研修に行き、そこで数ヶ月間で敬語を身につけた方もいらっしゃいます。短期留学中に**若者ことば**に触れる機会が多すぎ、それが定着した場合、一般社会で通じにくい場合があるので、要注意とのことです。

6・「**読み聞かせを継続**しました」

繰り返しになりますが、子どもが望むあいだは、読み聞かせを続けたいものです。

「おてて絵本」をご存知ですか。これは私が一時帰国をした時にテレビで見かけたのですが、両手を本のように見立てて、創造力を働かせて物語を作り上げていく親子遊びです。子どもが創るお話を親子で楽しんだり、親子で一緒に創作してもいいと思います。親が思う以上に子どもの創造力は豊かで、どんどん話してくれることに驚くこともあります。旅行などで、読み聞かせの絵本が手元にない時など、是非なさってみて下さい。

おてて絵本・創作中

◆子どもが抱えている ストレスを軽減するために親ができること

子どもにとって、複言語環境はやはりストレスが伴うものです。子どもは勝手に言語を学ぶだろう、子どもは柔軟性があるので、すぐに言葉を吸収するだろうと思われがちですが、ちょっと手助けが必要なお子様もいらっしゃいます。

ストレス過多になると、吃音・チックなど心因性の問題が出てくることもあります。そこで、親ができることは、幼稚園・保育園での様子を、ちょっとお迎えを早めに行くなどして見るようにし、園・学校の先生に子どもの様子を聞き、先生ともコミュニケーションを図ったり、子どもにも園の様子を聞いたりしていくと、いじめやその他の問題の回避にも繋がります。

ドイツの小学校の三、四年生くらいになると、進学の問題が出てくるため、ドイツ現地校の勉強に力を入れなければならない時期があります。優先順位をつけて、あれもこれもと子どもにストレスをかけ過ぎないように配慮が必要な時もあります。

◆言葉のセラピーを受けるには

次に、日本とドイツで、言語聴覚士によるセラピー（言語聴覚療法）を受ける方法について、それぞれ紹介します。

日本で受ける場合

保健センター等、**自治体**の窓口に行って、どういうことが心配なのかを具体的に伝え、ご相談下さい。**日本言語聴覚士協会**のホームページで病院などを検索（施設検索を開き、所在地を選び、対象領域は小児言語・認知を選択）することも可能です。[7]

病院にかかる場合は、医師の診察の後、言語聴覚士による評価およびセラピーとなります。医療保険が適用されます。

お魚を「おちゃかな」と言ってしまうような発音に問題がある場合は、四歳以降にセラピーを開始することが多いです。子どもとセラピストが一対一で向き合って発音練習をしますので、机の前にじっと座っていることができる年齢ということで、だいたい四歳が目安となっています。

音の種類によって発音できるようになる時期（年齢）がある程度決まっています。二歳前

後で唇を使う音（パ行・バ行・マ行）、三歳前後で舌の先を使う音（タ行・ダ行・ナ行）、舌奥を使う音（カ行・ガ行）、五歳から六歳ぐらいでサ行・ザ行・ラ行が言えるようになります。

それゆえ、例えば二歳でサ行が上手く発音できなくても、心配する必要はありません。しかし、口唇（こうしん）・口蓋裂（こうがいれつ）による発音の問題などは、早期の医学的介入が必要になりますし、鼻咽腔閉鎖機能不全（びいんくうへいさきのうふぜん）／鼻から息が漏れてしまって、パ行、タ行、カ行などの破裂音が不明瞭な話し方になる場合）や、舌小帯短縮症（ぜっしょうたいたんしゅくしょう）／舌の裏のヒダが生まれつき短かったり、くっついていたりする状態）で、舌が歯列より前に出なくて発音がしにくい場合や、言葉の遅れについて、ご心配なことがあれば早期に受診されることをおすすめします。

日本では、国公立小学校にある『ことばの教室』に通い、発音練習をすることもあります。

「どんな風に発音練習するのだろう？」と興味を持たれる方もいらっしゃると思います。国立特別支援教育総合研究所によって作成された、『ネットで学ぶ発音教室』[8]で、発音練習の実際（先生方がモデルを務めています）を動画で見ることができます。またサイトの中には保護者の方向けのリンク、親子で学べる発音教室もあります。

ドイツでロゴペディにかかる場合

ドイツ語では、言語聴覚士は Logopäde/Logopädin と呼ばれています。言語聴覚士のみで四人くらいでクリニック（praxis）を開業しているところが多くあります。そのため、発音の練習などは、まずクリニックに通うことになります。

手順は、かかりつけの小児科医師による診察後、セラピーが必要と認められれば、耳鼻咽喉科と Logopäde/Logopädin 宛に Überweisung（日本でいう紹介状の類）が処方されます。耳鼻咽喉科では、鼓膜など耳の診察及び聴力検査を受けます。Logopädie は一クールが一〇回です。（一回につき五〇ユーロ程度）

公的保険（gesetzliche Kranken- versicherung）でしたら子どもは無料ですし、私的保険（private Krankenversicherung）に加入されている場合は、保険会社と個人の契約に応じて保険が効きます。

日本もドイツも共通して言えることは、場所によってはセラピーの予約が取りにくい点です。また地域によって、通えるところが沢山あるところと、限られているところがあります。ご心配なことがあれば、早めに受診された方がいいと思います。幼稚園によっては、ことばの専門の先生が常駐していたり、週一回来園して評価したりしてくれるところもあります。

◆子どもたちのアイデンティティ

個人差があると思いますが、十代くらいになると、**「どこの国の人？」という問い**に悩む時期が来るかも知れません。ドイツという国、日本という国、その他の国の言葉、文化、歴史等を知っている、ぼく・わたしと思えれば、成長過程で長い間思い悩まずに済むかもしれません。

例えば「ドイツ人でも日本人でもある」という答えを見つけたお子様もいらっしゃいます。**一つの国、枠にとらわれない国際人**として、子どもたちが活躍することを願っています。

そして、昨今のグローバル化にともない、将来どこに住むようになるか未知数の家族も少なくないでしょう。また、災害が起こる可能性も、世界中どこで暮らしていてもありますし、親の介護が必要になり、日本に帰ることになるかも知れません。

親の都合で色々な国に住むことになる場合もありますが、複数言語を身につけた子どもたちが、将来的に**留学・就職・結婚**などで〈自ら〉住む国を選ぶことも大いにあり得ます。子ども自身、どこにいても**〈自分らしくありたい〉**と思うでしょう、また親としては、自分らしく活き活き過ごして欲しいと願います。

◆スポーツや芸術など非言語コミュニケーション

国際人として、今後世界に羽ばたく子どもたちには、言葉だけでなく、非言語でもコミュニケーションが楽しめるものに親しんでおくと、世界中どこに行っても、友達作りのきっかけが持ちやすくなるでしょう。

スポーツ系でしたら、サッカー、体操、剣道や柔道などの武道、カヌーなど。芸術系でしたら、音楽（ピアノ、オーケストラの楽器）、バレエ、絵、お料理などが考えられます。（図5）

日本文化を伝えるために、書道、華道、茶道、着物の着付け、武道などについても知っておくと尚、いいと思います。

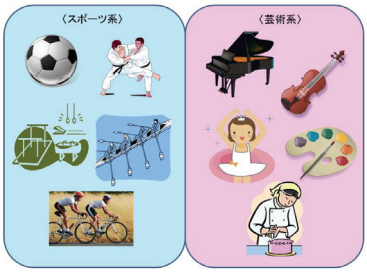

図 5　非言語コミュニケーシ

◆まとめ

言葉がけのコツとテクニックなどについて、ご紹介しました。子育てにおいて、どこにいても子どもたち自身がみな自分らしくいられるように**〈自己肯定感を育てる〉**、その意識があれば、方向性に間違いはないのではないかと思います。

〈自己肯定感〉とは、私は存在価値がある、必要な人間だ、大切な人間だ、私は私でいいんだ、という気持ちのことを言います。[9]

明橋大二先生の『子育てハッピーアドバイス』[10]という本と出会って、このことを私自身強く感じています。子育てに関する本がいろいろ出版されていますので、その中で自分に合った一冊に巡り合うと助けになると思います。今回寄稿させていただいた中で、皆様の心に一つでも響くものがあれば、嬉しく思います。

◆ご質問とお答え

これまでに寄せられた質問を紹介します。

幼児のママ達より

Q1

「子どもが車を見て、ドイツ語で「Auto」と言ってしまいます。」

【お答え】まず、Auto とドイツ語で言えたことを褒めて、認めてあげて下さい。「そうだね。ドイツ語では Auto だね。日本語では何て言う？」と聞いてみて下さい。3 歳以下のお子様でしたら、ドイツ語、日本語と使い分けることが難しいので、ドイツ語であろうと、日本語であろうと、言葉を話し始めたことが素晴らしいという気持ちで接するといいと思います。

Q2

「『日本語で言って！』と言っても、〈日本語〉という意味がわからないようなので、『ママの言葉で言って』と伝えているのですが、いいのでしょうか？

【お答え】カテゴリーの存在に気づき始めるのが、だいたい 4 歳頃と言われています。ですので、日本語という概念がわからなくても、ママの言葉で言ってと伝えていいと思います。

Q3

「子どもの話す日本語にアクセントや文法の誤りが沢山あり、 直すとなると全部直さないといけなくなってしまいます。」

【お答え】話すこと全部を直されると、話すこと自体が苦痛になってしまいます。日本語を話すことを嫌がる状況は避けたいので、嫌がらない程度、苦痛を伴わない程度に、さりげなく直してあげて下さい。（INREAL アプローチのリフレクティングを思い出して下さい）全部を直す必要はありません。

Q4

「公園で外国人ママと子どもと遊ぶ時に、それぞれの親子が母語で話しています。ドイツ語で話さなくてもいいのでしょうか？」

【お答え】ドイツは移民を多く受け入れている国ですので、ドイツ語の語学力には、個人差があります。何か共通の話題があり、ドイツ語で会話ができるのであれば、ドイツ語で話すといいと思います。子どもと一対一の時は、一人一言語の原則に基づけば、日本語で話すことが大切になりますが、一歩家の外に出ると、ドイツに住んでいるとドイツ語になります。特に外国人ママとの集まりでは、その場に集まる人や状況に合わせて、ドイツ語、英語など使い分けていいでしょう。

Q5

「（赤ちゃんが）特に言葉を話すわけではないので、無言でオムツ替えをしてしまっています。」

【お答え】言葉を話す前の段階でも、「オムツ替えようねー」などの言葉がけをされるとよいでしょう。オムツ替えの後、気持ちよくて笑い声が聞けるかも知れません。その時「気持ちよくなったねー」と言葉をかけてみて下さい。親が話しかける、そして赤ちゃんが笑うというようなやりとりが、コミュニケーションの基礎となり、やがて話すことに繋がります。赤ちゃんは聴いていますので、ぜひ声をかけながら赤ちゃんのお世話をして下さい。

Q6

「イライラしている時、自分が疲れている時、無口になって、言葉がけができていません。」

【お答え】ママが疲れていると、育児に影響が出ますね。自分自身がリフレッシュできる方法を見つけましょう。ご主人やご家族に協力してもらって、自分の時間を作ることから始めてみて下さい。

Q7

「上手く発音できない言葉（音）があるのですが、舌が短すぎるからでしょうか？」

【お答え】上手く発音できないと、舌が短すぎるから、もしくは長すぎるからではないかと心配される親御さんが多数おられます。口の中に舌が収まっていて、食べたり、飲んだりすることに支障がないのであれば、舌のサイズが問題ではなく、舌の使い方の問題です。舌を当てる場所（タ行でしたら、上の歯の後ろなど）などを理解し、発音練習することで苦手な音も言えるようになると思います。舌は筋肉でできていますので、繰り返し発音練習をして舌の使い方をマスターすると、正しい音が言えるようになります。

Q8

「食事の支度をしている時など、つい子どもに DVD やテレビを見させて過ごしているのですが、一日どのくらい見せてもいいのでしょうか？」

【お答え】最近では、ベビーカーを押しながら親がスマホに夢中になっていたり、乳児の時よりスマホを触らせたりすることも問題視されています。日本小児科医会が次のように5つの提言を出していますので、参考になさって下さい。

1） 2 歳までのテレビ・ビデオ視聴は控えましょう。
2） 授乳中、食事中のテレビ・ビデオの視聴はやめましょう。
3） すべてのメディアに接触する総時間を制限することが重要です。1 日 2 時間までを目安と考えます。
4） 子ども部屋には、テレビ、ビデオ、パーソナルコンピューターを置かないようにしましょう。
5） 保護者と子どもでメディアを上手に利用するルールをつくりましょう。

Q9（小学生のママより）

「ことわざの意味などを教える時に、ドイツ語で説明した方が子どもの理解も早いので、ドイツ語で説明しまっているのですが…」

【お答え】ことわざの意味を理解することが目的なので、お子様が理解しやすいのであれば、ドイツ語を使ってもいいと思います。質問者のママさんはドイツ在住15年以上でドイツ語も堪能でいらっしゃいますし、学習の目的に合わせて、言葉を使い分けていいと思います。日常の会話もすべてドイツ語に話してしまうと、日本語が伸びていかないので、お子様と一対一で日本語を話す時間も大切にされるとよいでしょう。

Q10（ギムナジウム生のママより）

「日本語の発音がドイツ語の影響を受けてしまっているのが、ずっと気になっているのですが、直るでしょうか？」

【お答え】日本にて、大学生・大学院生のセラピーをしたことがあります。発音に問題があり、就職の面接試験が通らず、自分でインターネットで調べて、言語セラピーを受けに来たのでした。どの音の時には、舌をどの位置に当てるというようなことを頭で理解し、家庭でも毎日練習すると、発音だけが問題の場合、大人になってからでも直ります。ドイツで生活する分には、あまり日本語の正確な発音は求められることは少なく、むしろコミュニケーション能力が必要と思います。

おすすめのゲームもご紹介します。ドイツ国内の一般的なおもちゃ屋さん・書店で購入できるドイツ語のゲームですが、もちろん日本語でも遊べます。ふだんドイツ語で遊ぶ機会の多い子ども達が日本語で遊ぶとなると、少し難しくなりますが、是非ご一緒に工夫して遊んでみて下さい。

Obstgarten（HABA 社製）

サイコロを振って、果物のパーツを取っていきます。対戦するのが、人対人ではなく、カラス対ヒトで勝敗が決まります。4歳5歳前後のお友達に負けるのが嫌だからゲームをやりたくないという年頃に特におススメです。果物のパーツは木でできており、温もりの感じられるゲームです。

Mein erstes Memo

（DIE SPIEGELBURG 社製）

ボール（名詞）やネズミが草木に水をやっている絵（動作）が描かれているカードがそれぞれ2枚ずつ入っています。組になっているものを2グループに分けて、1つのグループを表向きにテーブルに並べ、もう片方のグループのカードは袋に入れておきます。一人が袋からカードを1枚取り出し、名詞を言ったり、文章を作って読み、もう一人がカードを探します。1枚取ったら交代してもいいでしょう。名詞だけ、動詞だけでゲームをしてもいいですし、自由に難易度が変えられます。メモリーとして遊ぶのではなく、アレンジした遊び方です。

[1] 中川信子『ことばをはぐくむ―発達に遅れのある子どもたちのために』（ぶどう社、二〇〇二年／初版一九八六年）

[2] 中島和子『バイリンガル教育の方法　一二歳までに親と教師ができること』（アルク、二〇〇二年／初版一九九八年）

[3] 私は学生時代、大阪教育大学にて竹田契一先生（大阪教育大学名誉教授）の講義の中で、初めて「インリアル・アプローチ」について学びました。竹田先生は現在、大阪医科大学LDセンター顧問、一般社団法人日本LD学会副理事長、一般財団法人特別支援教育士資格認定協会の理事長などを務められています。

[4] 竹田契一監修、里見恵子、河内清美、石井喜代香著『実践インリアル・アプローチ事例集　豊かなコミュニケーションのために』（日本文化科学社二〇〇五年）、日本インリアル研究会〈http://www3.kcn.ne.jp/~inreal/〉

[5] 米国言語聴覚士協会認定言語聴覚士の英語名称は、CCC-SLP=　Certificates of Clinical Competence - Speech-Language Pathologist）。

[6] Medical Tribune（二〇一四年七月三日号）

[7] 日本言語聴覚士協会のホームページ〈https://www.jasltt.or.jp/〉

[8] 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所作成、ネットで学ぶ発音教室〈http://forum.nise.go.jp/kotoba/htdocs/〉

[9] 明橋大二『子育てハッピーアドバイス　大好きが伝わるほめ方、叱り方』（一万年堂出版、二〇一一年）

[10] 明橋大二『子育てハッピーアドバイス』（一万年堂出版、二〇一一年）